

干拓の陰で

匠 瑗 探 訪

196

黄金田の広がる干潟八万石は実りの時を迎えました。「樫の海」の干拓から350年、『海上町史』や『旭市史』などからその歴史を知ると、農民たちはまさに「水との闘い」だったと強く感じます。

江戸町人による樫海干拓計画がさまざまな問題を抱える中、幕府の許可が下りた1670(寛文10)年工事が始められました。



新川下流付近の様子

樫海湖水は井戸野、仁玉両村(ともに旭市)の間に短期間で掘られた排水路を古川に合流させ、吉崎浜まで流す計画でした。同年11月21日、突然放水され大きな被害となりました。

見通しが甘く工事を急いだのでしょうか。流れ出た水は堀割を乗り越え津波のように流域の村々を襲いました。市域では「小笹(東小笹)村と吉崎村」の2カ村と周辺5カ村(いずれも旭市)の被害状況を伝える具体的な記録はないとされますが、「家は流され、田畑は砂に埋まり、逃げ遅れ水のみ込まれた行方不明者は数えきれないほどいた」とされます。

この工事失敗による被害はその後も拡大し、樫海の南に位置する下郷13カ村は翌1671(寛文

11)年春の苗代作りの頃には用水がなく、村の代表が困窮の様子を幕府に訴えました。しかし、効果的な対策はなくその年の秋の収穫はありませんでした。特に被害が大きかった井戸野、仁玉両村ではこのままでは餓死してしまふ、と再度幕府に訴えるありさまでした。市域2カ村がこの苦難の時をどう乗り越えたのか残念ながら記録が残っていません。

樫海の干拓工事は難題を乗り越え続行され、周囲のため池とそれを結び総堀が造られ用排水対策が取られました。開発請負人や普請奉行の代官交代や資金不足などには幕府の援助も必要となりました。

新川河口付近の吉崎地区でも川に沿って黄金田が広がっています。この辺りが濁流にのみ込まれたのだろう、と思いをはせました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報広聴班

☎73・0080